

生誕250年 古典派とロマン派 “ベートーヴェン” 第1回
を繋いだ楽聖

プログラム

今年はドイツの生んだ偉大な作曲家ベートーヴェンの生誕250年に当たります。今日は、苦難に満ちた生涯を名曲とともにたどるシリーズの第1回目をお送りします。

ベートーヴェンは1770年12月16日、宮廷歌手の父のもとライン河畔の小さな町ボンに生まれました。幼少期から父によって音楽教育を受けますが、決して裕福ではなかった家庭で酒癖の悪い父は、幼少から才能を発揮していたベートーヴェンを利用して生計を立てようと考え、過重な勉強をさせ売り出しました。11歳の時に初めて正規の音楽教育を受け13歳で処女作を完成。17歳の時にウィーンに出て、彼の即興演奏を聴いたモーツァルトがその才能を予言したと言われています。その直後母を失い、彼は17歳で一家を支えて行くこととなりますが1792年ボンに立ち寄ったハイドンが彼のカンタータを聴いて誉めたのがきっかけで宮廷から学費をもらい、再びウィーンへ行く事ができました。この頃から作曲家としての道は開き始め、名声を得るようになります。1799年に作曲された**ピアノ・ソナタ第8番「悲愴」**は初期のソナタの頂点をなす作品で、自ら名付けた標題が示すように全体の気分を支配する導入部や力強い意志表現など、ベートーヴェンの名を一躍高めた名曲です。一方で28歳を過ぎた頃から耳鳴りを自覚するようになった彼は、31歳の頃にははだいに耳が聞こえなくなっていました。1802年32歳の夏、医者のおすすめでウィーン郊外のハイリゲンシュタットに居を移しますが、閑静な自然は逆に彼を孤独と絶望へと誘い、その年の10月に2人の弟にあてた遺書を書きました。これが「ハイリゲンシュタットの遺書」として知られるものです。一度は死を決意したベートーヴェンでしたが、まだ芸術の力が心に響いていることを悟った彼は、再びウィーンに戻り、かつてない強い靈感を得て創作に励んでいきます。その遺書の直後に完成されたのが**交響曲第2番ニ長調**で、暗い絶望的な気分など全くなく、瑞々しさと生き生きとした生命の高揚感を感じさせます。絶望から這い上がろうとする力強い精神力、静かな境地から生まれた傑作です。その後も創作意欲は旺盛で、彼が最も幸福だった時代に書かれた傑作のひとつが**ヴァイオリン協奏曲ニ長調**で、交響曲第4番を完成した頃の1806年の作品です。アン・デア・ウィーン劇場管弦楽団のコンサートマスターだった名手フランツ・クレメントのために書かれ、彼の独奏によって初演されましたが成功せず、1844年に名手ヨアヒムがメンデルスゾーンの指揮で演奏されてから有名になりました。高貴な風格と雄大な輝きに満ちた名曲で、古今のヴァイオリン協奏曲の最高傑作のひとつです。翌1807年には**序曲「コリオラン」**を書き上げます。これはオーストリアの劇作家コリンが書いた同名の悲劇をもとにした序曲で、コリオランとはプルタークの英雄伝に出てくるローマの英雄です。同じハ短調の交響曲第5番と曲想が似ていますが、この曲は終始悲劇的な気分を満たされています。

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

序曲“コリオラン”ハ短調op.62

クルト・サンデルリンク指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
(1993.6.16 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

ヴァイオリン協奏曲ニ長調op.61 ~ 第1楽章、第2楽章、第3楽章から

イダ・ヘンデル (ヴァイオリン)

ウラディーミル・アシユケナージ指揮ベルリン・ドイツ交響楽団
(1995.8.30 ベルリン・コンツェルトハウスでのLive)

*** 休憩 ***

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827):

ピアノ・ソナタ第8番ハ短調op.13 “悲愴”

アルフレード・ブレンデル(ピアノ)

(1994.3.11 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

交響曲第2番ニ長調op.36 ~ 第1楽章、第2楽章、第4楽章

小澤征爾指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

(1989.4.24 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)